

埼玉県学力・学習状況調査の結果等について

I 埼玉県学力・学習状況調査の概要

II 令和8年度の調査結果

III 令和8年度の実施状況

IV 結果の活用推進

● 参考資料

埼玉県学力・学習状況調査の結果等について

I 埼玉県学力・学習状況調査の概要

II 令和8年度の調査結果

III 令和8年度の分析

IV 結果の活用推進

● 参考資料

I 埼玉県学力・学習状況調査の概要

調査の目的	本県の児童生徒の学力や学習に関する事項等を把握することで、教育施策や指導の工夫改善を図り、児童生徒一人一人の学力を確実に伸ばす教育を推進する。
実施期間	令和8年5月7日(木)～5月20日(水)
調査学校数・児童生徒数	県内の公立小・中学校等(さいたま市を除く)に在籍する小学校第4学年から中学校第3学年の全児童生徒 小学校 672校 134,018人 中学校 347校 125,525人 義務教育学校 5校 918人 県立中学校 1校 236人 計260,697人
調査事項	ア 児童生徒に対する調査 ① 教科に関する調査 (出題数は各学年30～33題、出題形式は選択式・短答式・記述式) 小学校第4学年から第6学年まで 国語、算数 中学校第1学年 国語、数学 中学校第2学年及び第3学年 国語、数学、英語 ② 質問調査 学習意欲、学習方法及び生活習慣等に関する事項(質問数は学年により101～113項目) イ 学校及び市町村教育委員会に対する調査 学校における教育活動並びに学校及び市町村における教育条件の整備等に関する事項 ※ 調査は全てタブレット端末等を使用したCBTで実施
特 長	○学力の伸び(経年変化)などを継続して把握することのできる調査 ・小学校第4学年から中学校第3学年までの同一児童生徒を継続して調査し、学力の伸びを把握 ・PISA(国際学力到達度調査)と同様の調査手法(項目反応理論)を採用 ○非認知能力・学習方略を測定することのできる調査

埼玉県学力・学習状況調査の結果等について

I 埼玉県学力・学習状況調査の概要

II 令和8年度の調査結果

III 令和8年度の分析

IV 結果の活用推進

参考資料

II 令和8年度の調査結果

教科に関する調査結果

①ほとんどの学年・教科で、学年が上がるごとに、「学力のレベル」が伸びている。

国語

学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3
現中3	18	18	20	21	22	24
現中2	16	19	19	22	23	
現中1	16	17	19	23		
現小6	14	17	19			
現小5	14	17				
現小4	14					

横に見ることで、
同一の集団の学力
の推移が分かる

⇒ 今年度の数値

算数・数学

学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3
現中3	15	16	17	17	21	21
現中2	14	16	17	18	20	
現中1	13	14	16	18		
現小6	12	14	16			
現小5	12	14				
現小4	13					

⇒ 今年度の数値

英語

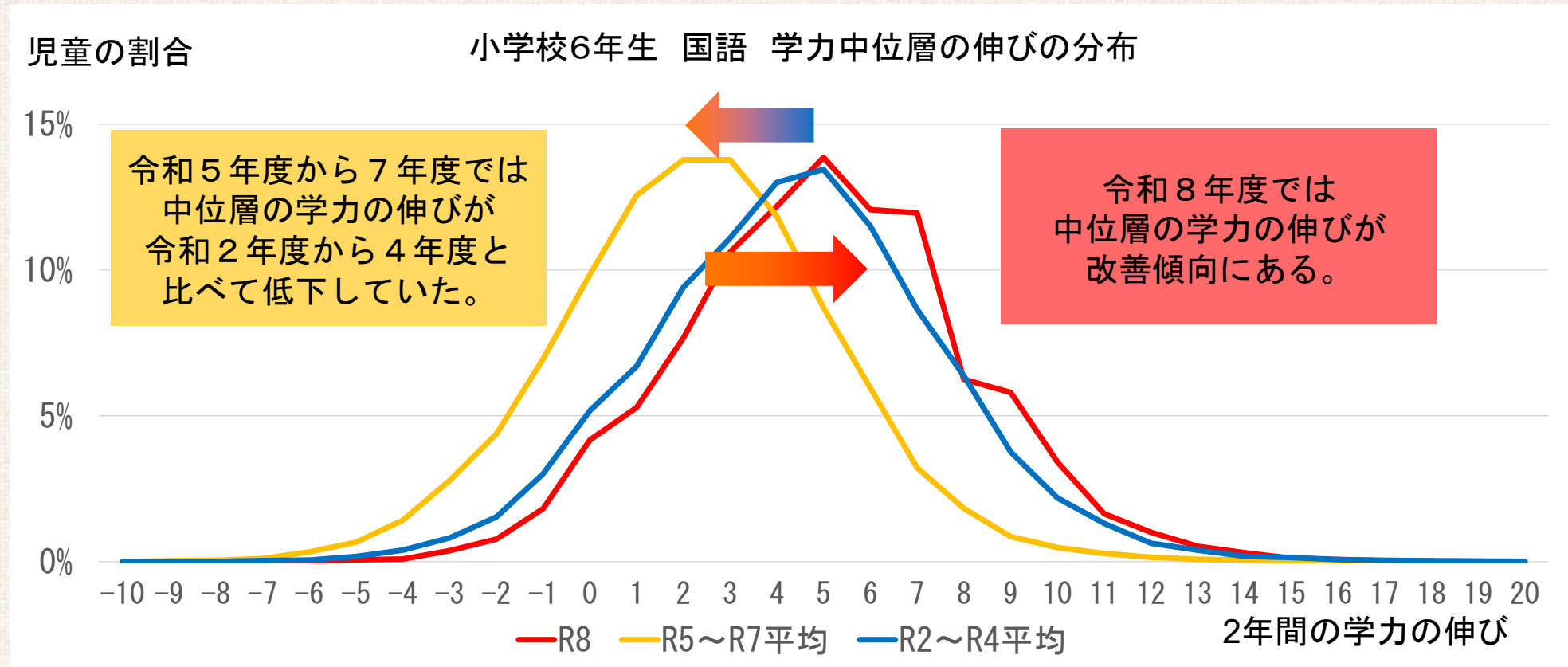
学年	中2	中3
現中3	25	27
現中2	25	
現中1		
現小6		
現小5		
現小4		

⇒ 今年度の数値

- ※ 小4～中3で「学力のレベル」は、36段階で設定している。
- ※ 表の数字は各学年の「学力のレベルの平均値」を表している。

II 令和8年度の調査結果

②令和5年度より見られていた学力中位層の伸び悩みは、令和8年度は改善傾向にある。



※ 学力中位層とは、学力の上位25%及び下位25%を除いた、中間の50%の児童生徒を指す。

埼玉県学力・学習状況調査の結果等について

I 埼玉県学力・学習状況調査の概要

II 令和8年度の調査結果

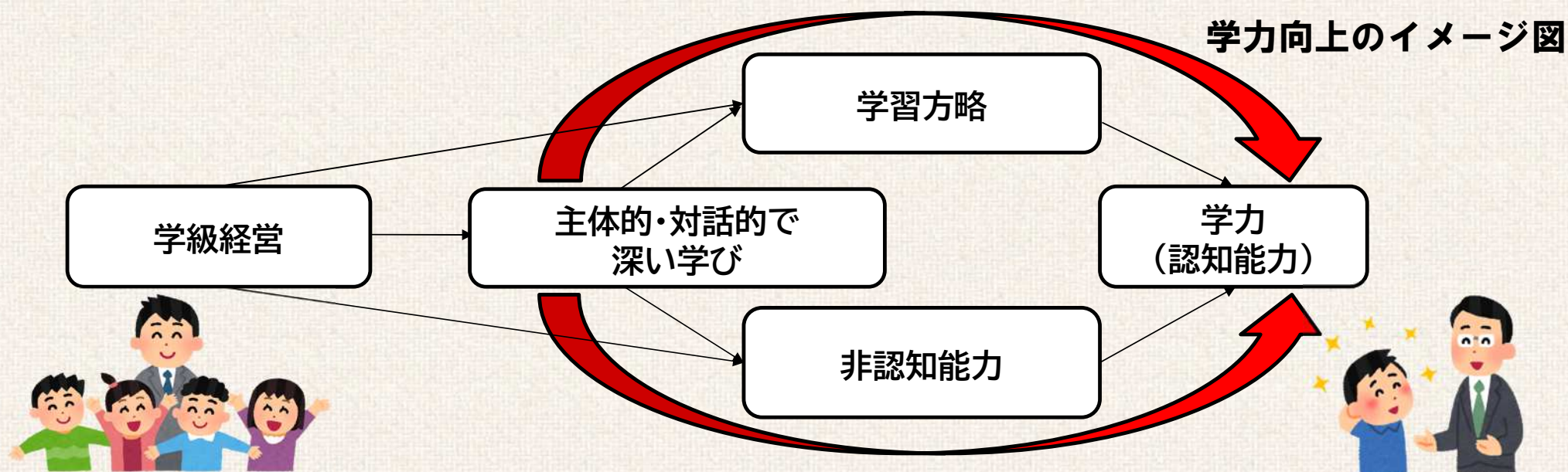
III 令和8年度の分析

IV 結果の活用推進

参考資料

Ⅲ 令和8年度の分析

これまでの分析結果で分かっていること



○「主体的・対話的で深い学び」の実施に加えて、「学級経営」が、子供の「非認知能力」「学習方略」を向上させ、子供の学力向上につながることが分かっている。

Ⅲ 令和8年度の分析

6年間の学力の伸びの差が、「主体的・対話的で深い学び」
「学習方略」「非認知能力」のどの項目と関連しているのかを、
学力層ごとに分析



過去5年度の中学3年生について
それぞれ小4から中3までの
6年間を追跡



H29～R4

H30～R5

H31～R6

R2～R7

R3～R8

Ⅲ 令和8年度の分析

学力層ごとに特に効果的だと考えられる指導の例

「努力調整方略」

段階的な手がかりを示し、つまずいても諦めずに粘り強く取り組む経験を積ませる。

特に下位層



「自己効力感」

小さな進歩や取組の過程を具体的に認めて価値づけ、「自分ならできる」という自信を育む。

特に中・上位層



「主体的・対話的で深い学び」

協働的な話し合いや既習事項との関連付けを通して、多角的な視点から学びを深めさせる。

すべての学力層



「認知的方略」

学んだことを自分の言葉で説明する・まとめる・再構成するなどの学習活動に取り組ませる。

すべての学力層



◆学力層ごとに効果的な学習方略等を意識した指導が重要である。

埼玉県学力・学習状況調査の結果等について

I 埼玉県学力・学習状況調査の概要

II 令和8年度の調査結果

III 令和8年度の分析

IV 結果の活用推進

● 参考資料

Ⅳ 結果の活用推進

複数校一斉型ハイブリッド研修の実施

県内380校、約4,700人が参加

各学校の演習

学校ごとに自校のデータを分析し、実態を把握する。

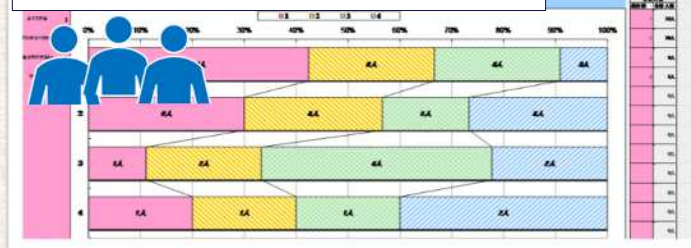
データA: 個々の学力と学習方略等

個人コード	性別	学年	学校平均	学力										学習方略										基礎能力		
				9-B	26	3	8-B	23	9-A	27	3	8-A	24	11-A	33	0.1	-0.3	0.0	0.1	-0.1	-0.3	-0.3	-0.1			
  			市町村平均	8-A	24	2	8-C	22	8-B	23	3	7-B	20	11-A	33	0.1 <th>-0.3</th> <th>0.0</th> <th>0.3</th> <th>-0.1</th> <th>0.0</th> <th>-0.3</th> <th>-0.1</th>	-0.3	0.0	0.3	-0.1	0.0	-0.3	-0.1			
			市立豊平平均	8-C	22	1	7-A	21	7-A	21	2	6-B	17	9-C	25	0.1 <th>-0.1</th> <th>-0.1</th> <th>0.0</th> <th>-0.1</th> <th>-0.2</th> <th>-0.2</th> <th>0.0</th>	-0.1	-0.1	0.0	-0.1	-0.2	-0.2	0.0			
			新豊 露乃	9-C	25	1	8-C	22	9-A	27	9	7-B	20	9-B	26	0.3	0.3	0.3	0.3	0.5	1.3	0.4	-0.3			
	879012	2	1	2	男	人間 京都	8-B	23	1	7-B	20	11-B	32	2	7-A	21	10-A	30	0.9	0.0	-0.2	-0.2	0.0	-0.5	0.3	0.2
	879014	2	1	3	男	小川 和純	11-A	33	3	10-B	29	11-A	33	1	10-A	30	11-A	33	-0.2	-0.3	0.0	0.0	-0.5	0.5	0.5	-0.2
879015	2	1	4	女	春日 裕紀	9-A	27	5	7-C	19	8-B	23	0	8-C	22	10-B	29	-0.1	0.5	-0.2	-0.5 <td>0.0</td> <td>0.0</td> <td>0.0</td> <td>0.0</td>	0.0	0.0	0.0	0.0	
879016	2	1	5	男	加瀬 麗太	7-B	20	-4	7-A	21	6-B	17	-4	5-A	15	8-C	22	0.1	-0.5	0.4	0.3	-0.3	-0.5	0.0	0.4	

データB: 解答時間と正答率

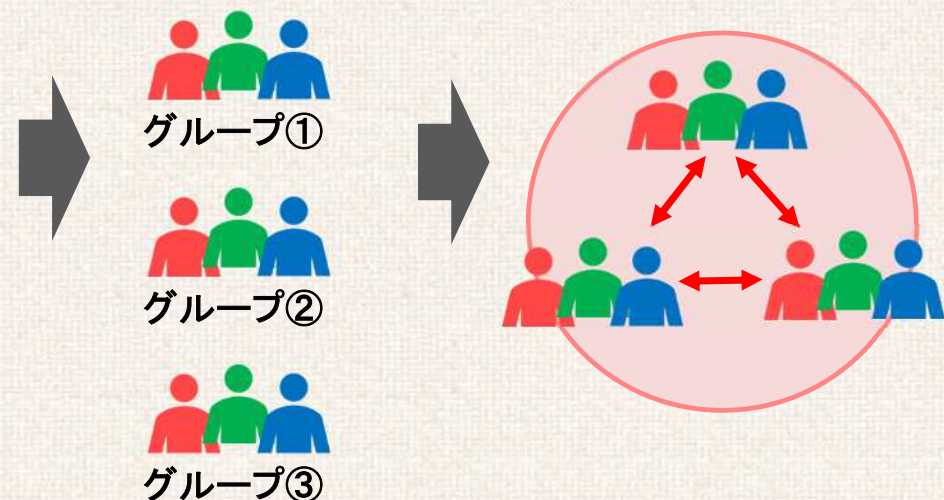


データC: 質問調査の回答状況



分かったことを
グループで共有・
協議する。

グループの協議結果
を发表し合い、理解を
深める。



IV 結果の活用推進

参加校での共有

他校の分析や実践を共有する。



校内で、教科部会だけでなく特別活動部や生徒指導部、さらには近隣小・中学校とも連携し、学力向上プランの見直し、修正につなげます。

ペア学習等で自分なりの言葉で説明し、聞き合う場面を意図的に設定します。



小さな成功体験と「役に立った」という実感を育むよう意識して指導していきます。

研修を終えての感想

- 先生方とアウトプットし合うことで、新たな発見や確認ができ、とても有意義だった。
- これまでは自分の学校だけで研修の準備をして大変だったが、今回は一緒に取り組む他校の存在があり、安心して充実した研修を行うことができた。

埼玉県学力・学習状況調査の結果等について

I 埼玉県学力・学習状況調査の概要

II 令和8年度の調査結果

III 令和8年度の分析

IV 結果の活用推進

● 参考資料

【参考資料 1】 県学調の特長①（学力の伸びを測る）

項目反応理論(IRT)

○児童生徒の正答・誤答が、問題の特性(難易度、測定精度)によるのか、児童生徒の学力によるのかを区別して分析し、児童生徒の学力スコアを推定する統計理論のこと。

○本調査では、学力を「学力のレベル」として提示している。
→ 小学校第4学年から中学校第3学年までの全ての問題に難易度を設定することで、学力のレベルを測定している。

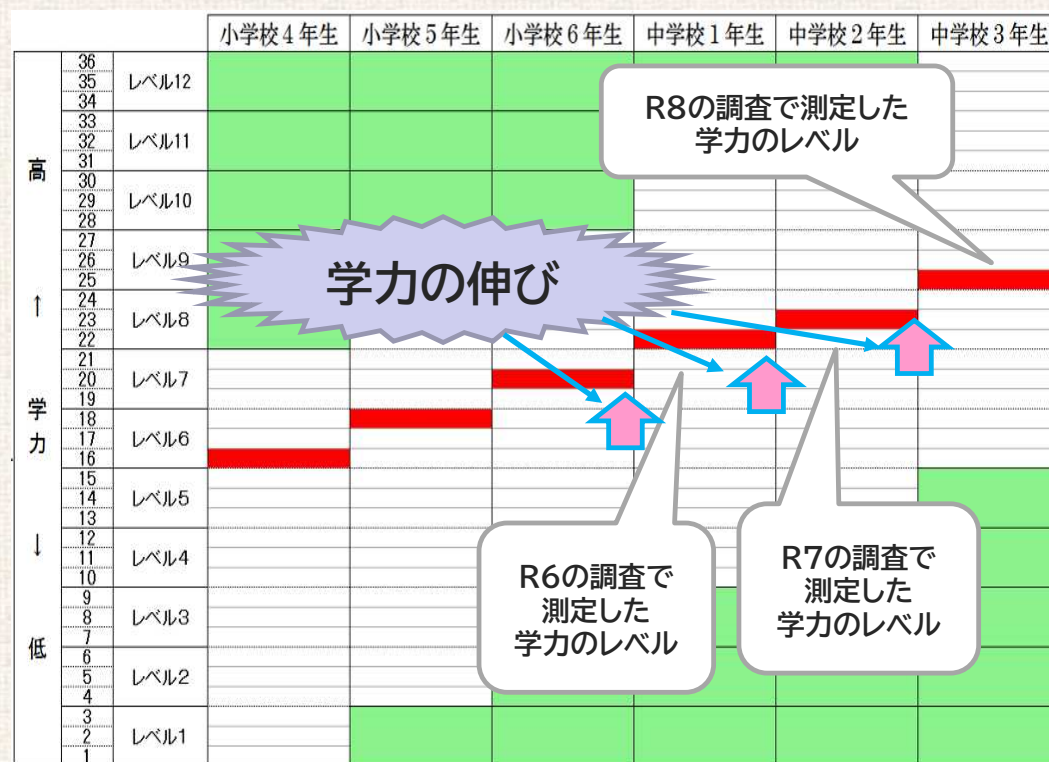
○本調査における「学力のレベル」の考え方

- ・「どのくらい難しい問題を解く力があるか。」を学力のレベルで表している。レベルが上がるほど、難易度の高い問題を解く力がある。

○本調査における「学力の伸び」の考え方

- ・年度間の「学力のレベルの差」を学力の伸びと捉える。

○学力のレベルは、36段階(12レベル×3層)で設定している。



【参考資料2】 県学調の特長②（非認知能力や学習方略）

非認知能力

○認知能力…いわゆる学力であり、たし算、漢字の読み書き、文章題、図形の把握などができる力

○非認知能力…認知能力ではない能力全般

自制心	イライラしない、心の平静を保てる など
自己効力感	自分への自信、自己肯定力 など
勤勉性	やるべきことをきちんとやる など
やりぬく力	粘り強い、根気がある など
向社会性	他者を助けようとする など

※県学調で測っている非認知能力

学習方略

○学習方略…学習の効果を高めるために子供が意図的に行う活動

柔軟的方略

学習の仕方を自分の状況に合わせて柔軟に変更していく活動

<例> 勉強の順番を変える、分からないところを重点的に学習するなど

プランニング方略

計画的に学習に取り組む活動

<例> 勉強を始める前に計画を立てる など

作業方略

ノートに書く、声に出すといった、「作業」を中心に学習を進める活動

<例> 大切なところを繰り返し書く など

認知的方略

より自分の理解度を深めるような学習活動

<例> 自分の言葉で説明する・まとめる・再構成する など

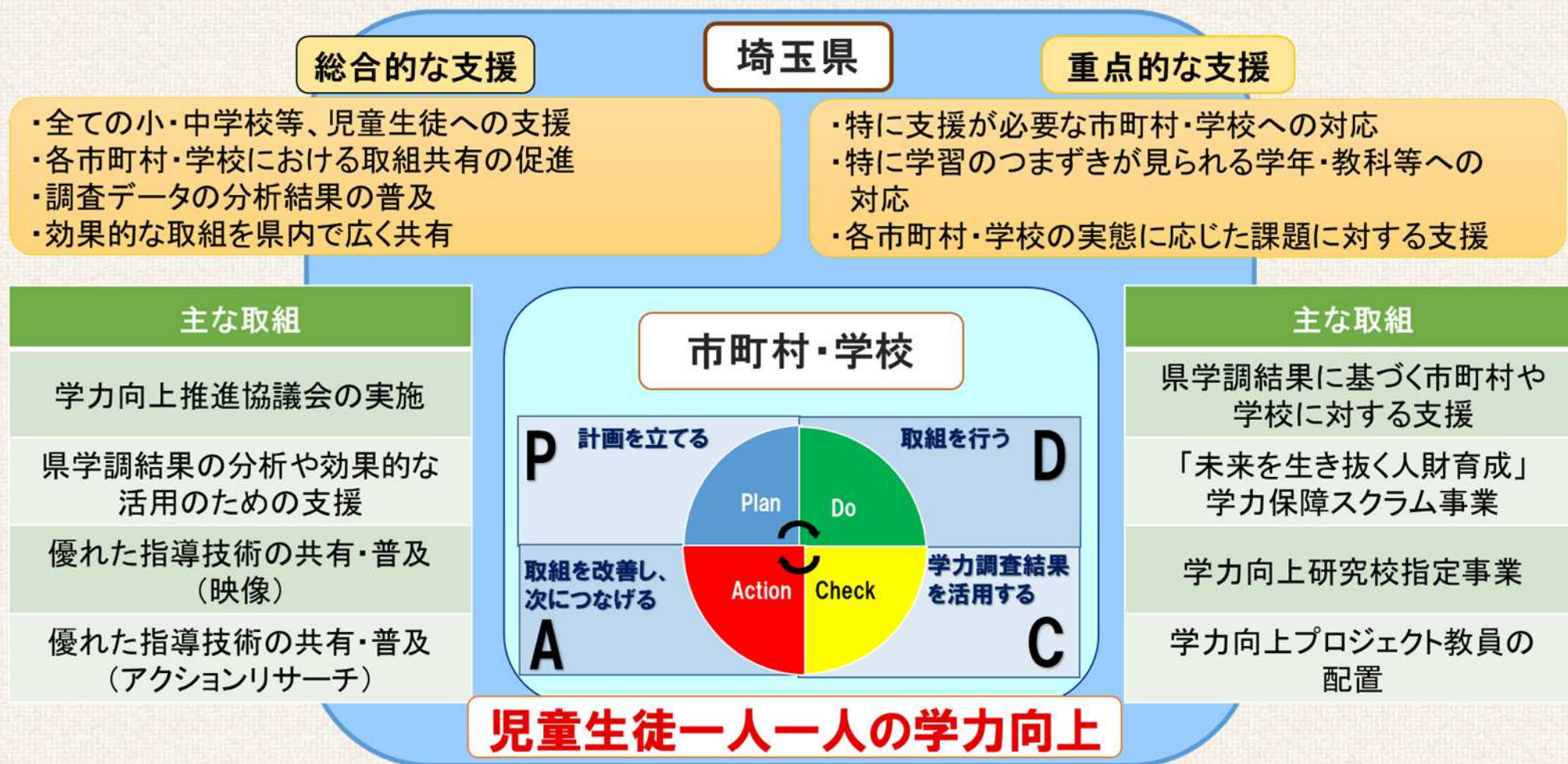
努力調整方略

「苦手」などの感情をコントロールして学習への動機を高める活動

<例> わからないところをあきらめずに継続して学習する など

※県学調で測っている学習方略

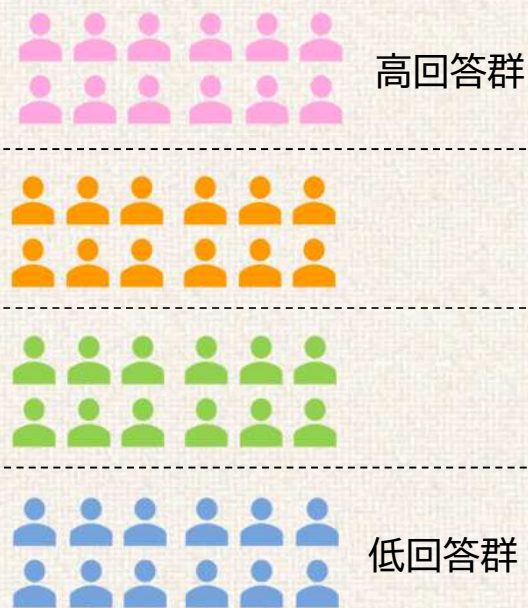
【参考資料3】 県の学力向上施策



【参考資料4-1】 令和8年度の分析（方法）

分析方法

① 「主体的・対話的で深い学び」
「学習方略」「非認知能力」の
質問の回答値をもとに分類*1



*1 各項目に対して当てはまる程度を5段階で質問し、
6年間の平均で上位25%を「高回答群」、下位25%
を「低回答群」とした。

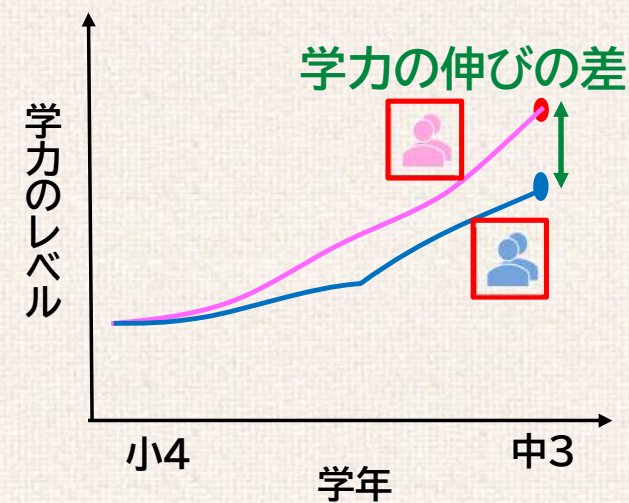
② 学力のレベルをもとに分類*2



*2 小学校4年生の時の学力のレベル順に
25%ずつの4層に分けた。

③ 学力層×回答群における
小4から中3の伸びを比較

(例)中下位層×自己効力感



【参考資料４－２】 令和８年度の分析（結果）

分析結果 すべての項目で高回答群の方が低回答群よりも学力が伸びている。

	主体的・対話的で深い学び	学習方略					非認知能力
		柔軟的方略	プランニング方略	作業方略	認知的方略	努力調整方略	自己効力感
上位層	1.4	1.0	0.9	1.1	1.8	2.9	4.0
中上位層	1.2	1.0	0.9	1.0	1.4	2.7	3.3
中下位層	1.1	0.9	0.8	1.0	1.1	2.3	2.5
下位層	0.9	0.7	0.6	0.6	0.9	2.2	1.4

※ 表内の数値は、小４～中３での学力のレベルの伸びの平均値について、「高回答群」から「低回答群」を引いた値

◆「主体的・対話的で深い学び」「学習方略」「非認知能力」の全項目において学力の伸びとの関連が見られた。

【参考資料4－3】 令和8年度の分析（指導の具体例）

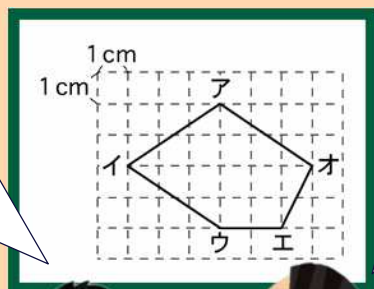
すべての学力層に効果的だと考えられる指導の具体例

「主体的・対話的で深い学び」

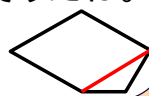
小学校算数

五角形の面積の求め方を考える場面

横に直線を引けば、**三角形と台形に分けて**求められそうだよ。

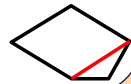


ウとオを結んだら**ひし形と三角形に分ける**こともできそうだね。



本当にひし形だと言えるかな？

あっ、確かに4つの辺が全部等しいね！



求め方を**知っている形に分ける**ことと、本当にその形かを確認することが大切だね。

既習事項との関連付けたり、多様な意見と比較検討したりして、多角的な視点から学びを深めさせる。

「認知的方略」

中学校国語

書いた文章のよい点や改善点を見いだしまとめる場面

ここでの情景描写では、**前に学んだ**比喩表現を使ってみました。



擬音語も入れると読む側にイメージがより伝わりやすいと思います。

皆さんからもらったアドバイスを生かして、**さらによくなるように改善**してみます。



これまでの学びや交流を通して、自分の文章のよい点や改善点を見つけられましたね。今後に生かしたいことをまとめましょう。

これまでの学びや、読み手からの助言をもとに、自分の言葉で表現したり再構成したりする。